「表現する」ということ

詩や文章を作る際に字句や表現を十分に吟味して練り直すことを「推敲」と言います。唐の詩人賈島が、自作の詩「僧は推す月下の門」の「推す」を「敲く」にするかどうか迷い、何度も練り直した末に、賈島の詩才を認めていた文人・韓愈に尋ねて、「敲」の字に改めたという故事から出た言葉です。賈島の生きた唐代は、漢詩の中でも近体詩の厳格な規則（一句の字数や一首の句数、韻の踏み方など）が確立した時期です。同じ意味を持つ言葉でも、微妙なニュアンスの違いがあり、自分の意図や感情に合った言葉を慎重に選ぶことが、認められる詩を作る条件でした。「推す」か「敲く」か。たった一字の迷いですが、賈島は一つの単語を何度も考え、変えることで詩の表現を高めることに成功し、現代にも続く「推敲」の大切さを物語る故事と言えるでしょう。

表現する、ということに関しては、「推敲」と同じく、教材として扱った文章で忘れられないものがあります。黒崎政男氏の「インターネットは何を変えたのか(ネットが崩す公私の境)」です。活版印刷術の発明以降における著者の権威性の変化と、現代のインターネット時代における著者と読者の関係に焦点を当てています。教科書で扱ったのは平成 20 (2008) 年ですが、平成 14 (2002) 年出版の新書からの出典ですから、今から 20 年以上前に書かれたものになります。久し振りに取り出して読んでみましたが、20 年以上経った現代を言い当てているかのような内容です。

「紙」が情報の中心だった時代は、情報量が多すぎると読み切れません。ですから質の高いものだけ選別して発信する必要があったのです。一方、インターネットは検索機能があり、欲しい情報はすぐに取り出せるので、情報量を絞る必要はなくなりました。また、既成のメディアによる発信は、公開されるまでに情報は複数の目を通ることになり、正誤を判断したり、表現に手を入れたり、発信までに時間がかかります。しかし、インターネットによる発信は、考えてから公開するまでの時間や手間がかかりません。不正を告発しやすくなるなど、よいこともあれば、匿名性を利用した個人の誹謗中傷がコミュニティや企業を崩壊させることもあります。誰もが簡単に発信できるようになったことで、インターネットにおいてプライベート（私）とパブリック（公）の境界が曖昧になり、個人の意見や理解がネット上で強大な力を持つことになった、ということなのです。

この文章を作成するのに、自分が授業で使った内容を改めて確認し、限られた字数でどう伝えるかを考えながら、それなりの時間をかけました。生徒会誌は本校の生徒を中心に、限られた人にしか伝わらないメディアではありますが、SNS のような多様な手段があるからこそ、人の目に触れる文章を書く、ということの重み、そして「推敲」することの重要性を改めて考えてみたいと思います。

令和 6 年 (2024 年) 2 月 生徒会誌「珠文」巻頭言 校長 三井 智和